



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2014.7 第56号



提◆言

豚はよく飼え

独立行政法人 農業・食品技術総合研究機構
動物衛生研究所 所長

津田 知幸

近年、アジア周辺国で口蹄疫や高病原性鳥インフルエンザ等の発生が相次いでいることから、これらの伝染病がわが国に侵入する危険性が高まっているとして、飼養衛生管理基準の遵守が叫ばれています。また、北米での豚流行性下痢（PED）の初発生と急激な蔓延や、日本でのPEDの流行などを契機に、改めて消毒と同基準の重要性が強調されています。しかし、この基準にこだわりすぎて農場の衛生対策が硬直化し画一的になることなく、農場に合わせたきめ細かな工夫を重ねることも重要だと思えます。

海外伝染病に限らず、伝染病対策において日常的な衛生管理が重要であることは古くから認識されており、その要点は飼養者の義務として家畜伝染病予防法にも明記されています。平成23年に改正された家畜伝染病予防法では、伝染病対策に関する国や地方自治体の役割を明確にするとともに、健康な家畜の飼養と疾病予防は家畜飼養者の責任であることを前提として飼養衛生管理基準が定められました。しかし、畜種や飼養規模に応じて具体的に定められた飼養衛生管理基準は、あくまで海外伝染病の侵入と蔓延防止及び早期届け出を主眼にしたものであることに留意する必要があります。基準をうまく利用すれば、農場での常在疾病の発生予防にも役立ちますが、その場合には農場の条件によって留意するポイントを順位付けし、必要な点を追加するなどの農場にあった工夫が必要だと思えます。

日本の養豚の導入期に作成された一枚のポスターがあります。!!恐ろしい伝染病来る!!で始まるこのポスターは、昭和8年に豚コレラ予防を啓発する目的で神奈川県が制作したものです。「豚は健康に（よく）飼へ、伝染病（やまい）は怖い、怖い病（やまい）を防ぐには、予防第一、二に注射、三に消毒、四に管理（ていれ）、清潔（きれい）な豚舎（ところ）で飼いませう」と、飼養衛生管理の要点を語呂よくまとめたその内容

は、豚や飼料の入手から、異常豚への対応等を紹介し、特に消毒や手入れ、糞尿の管理等の日常管理についても具体的に記載されており、豚コレラに限らず他の病気の予防にもつながるものです。当時、畜産の振興は国策といえるものであり、伝染病の蔓延防止には警察力が用いられていましたが、飼い主に対しても伝染病対策の要は飼い主自身であることを啓蒙する必要があったのだと思えます。数頭の豚を飼養するだけの個体の健康管理が中心であった時代から、数千頭規模の豚を飼養し、施設や飼料、環境、糞尿処理にまで配慮したSPF豚生産システムにまで発展した現在の養豚業では、豚の飼養頭数も飼養形態も大きく異なりますが書かれている要点はほとんど同じことに気づかれます。

生き物にとって病気は不可避のものですが、家畜の疾病リスクを最小限に抑えるのは、昔も今も変わることのない飼養者の努めです。個体管理を中心とした昔の伝染病対策も、農場バイオセキュリティや飼養衛生管理基準といった群管理を中心とした衛生対策も、自分の家畜を病気から守るという基本は何も変わりません。感染症は外部からの病原体の感染によって起こりますので、消毒と侵入防止対策を強化すれば、理論的には予防が可能です。しかし、こうした対策に加えて、感染源を作らないような環境対策やワクチンによる免疫付与などの宿主対策を複合的に行う必要があります。現在、多くの感染症に対してワクチンが開発され、様々な種類の消毒薬が利用されています。農場にあったワクチン接種プログラムの策定や、場面に応じた消毒薬の選択に加えて、感染源対策としての農場内の環境対策等々は、まさに注射、消毒、手入れが意味するところであり、飼養者の知恵の見せ所ではないでしょうか。「豚は健康（よく）飼え」が「賢く、巧く、健康に飼う」ことを目指すのであれば、飼養衛生管理基準の最終目標もまた同じであるのかもしれない。

今年度の社員(代議員)総会を開催

事業計画、予算案など全ての議案を承認

平成26年度の定時総会(代議員会)は6月12日(木)午後、東京都千代田区のKKRホテル東京において開催されました。昨年度の事業経過報告はじめ同決算および監査報告、代議員および役員との交代、今年度の事業計画および予算案などすべての議案が承認されました。概略は次の通りです(会員の皆さまには議案および議事録をすでにお送りしてあります)。

H25年度事業経過報告

S P F豚農場認定制度を柱として各事業に取り組みました。大型農場の認定申請見送り等により、認定農場数は183農場(6農場減、GGP・GP農場20、CM農場163)、飼養母豚数は78,720頭(2,151頭減)となりました。

生産成績は、一貫経営農場では1母豚当たり年間出荷頭数が21.5頭(24年度21.5頭、同全国平均19頭弱)でした。A薬品費(抗菌性物質)は170円(全国平均900円弱)で前年より若干増加しました。また、農場要求率は3.24(24年度3.24)でした。繁殖専門農場-IIでは1母豚当たり年間出荷子豚頭数に大幅な改善が見られました。肥育専門農場-IIは前年とほぼ同じでした。

S P F豚の普及活動としては、10月に川崎市で開催された「ちくさんフードフェア」に出展、S P Fポークの試食、アンケート及びパネル展示を実施しました。フェアには2日間で約13万人近い来場者がありました。

11月にはS P F豚セミナーを開催しました。133名のご参加をいただきました。

利用促進をお願いした認定シールの販売は644万枚(前年度比110.9%)に留まりました。協会オリジナルキャップとTシャツの販売、およびポークリーフレットの配布も継続しています。

前年度同様協会カレンダーを制作し(協会オリジナル版に変更)、全会員に配布いたしました。協会だよりは51号、52号、53号、54号を発行しました。

また、地域研修会を5年ぶりに、東北地区で開催しました。

平成25年度の事業経過はつぎのとおりです。

- ・ 4月22日(月) 正副会長会議
- ・ 5月10日(金) 平成24年度会計監査
- ・ 6月6日(木) 認定委員会
S P F豚農場認定規則見直し委員会
- ・ 6月12日(水) 理事会および定時総会
会場：KKRホテル東京(千代田区)
- ・ 7月9日(火) 正副会長会議
- ・ 8月9日(金) ピラミッド会議
S P F豚農場認定制度見直し疾病ワーキンググループ(WG)会議
- ・ 8月20日(火) ちくさんフードフェア企画委員会
- ・ 8月30日(金) 生産成績優秀CM農場選考委員会
S P F豚農場認定制度見直し生産成績WG会議
- ・ 9月12日(木) 認定委員会
- ・ 9月27日(金) ちくさんフードフェア企画委員会
- ・ 10月12日(土)～13日(日) ちくさんフードフェア
会場：(財)日本食肉流通センター(川崎市)
- ・ 10月28日(月) 正副会長会議
- ・ 11月5日(火) 平成25年度S P F豚セミナー
会場：KKRホテル東京(千代田区)
- ・ 11月15日(金) S P F豚農場認定制度見直し疾病WG会議
- ・ 12月5日(木) 認定委員会
- ・ 12月20日(金) 正副会長会議
- ・ 2月6日(木) S P F豚農場認定制度見直し疾病WG会議
- ・ 2月20日(木) 東北地区地域研修会
会場：岩手県民情報センター(盛岡市)
- ・ 3月13日(木) 認定委員会
- ・ 3月28日(金) 理事会

H26年度事業計画

防疫設備基準、防疫管理基準の徹底

S P F 豚農場認定規則および関連する基準、細則に基づき、厳格な運用を行います。

認定委員会の開催

S P F 豚農場認定事業を推進します。認定委員会は6、9、12、3月の計4回開催します。

S P F 豚農場認定制度の見直し

昨年度疾病および生産成績検討ワーキンググループを立ち上げ、問題点を検討しております。今年度も継続事業とします。両ワーキンググループでの検討結果を、「S P F 豚農場認定制度見直し委員会」（仮称）に諮り、最終案を審議します。また、豚流行性下痢症（PED）問題について疾病グループで検討していきます。

認定成績集計結果のフィードバック

引き続きS P F 豚農場認定申請に提出される生産成績を集計し、認定証発行時にこれまでの成績の推移を、また年度末に各認定項目の順位表を、各ピラミッドを通じて農場にフィードバックします。ベンチマーキングに活用して農場成績の改善に役立ててもらいます。

生産成績優秀CM農場の表彰制度の継続

例年通り、生産成績優秀CM農場を選考委員会により選定、セミナーで表彰します。新たな表彰の対象項目についても検討を加えていきます。また、集計を開始して10年経過したことから、この間連続して上位25%の成績をキープした農場の表彰も検討します。

ピラミッド会議の開催

円滑な事業推進のため、昨年に続きピラミッド会議を開催します。生産成績低迷CM農場の成績向上策、非認定農場の実態調査・セミナー・地域研修会・技術懇談会等のテーマ・内容について、検討していきます。

S P F 豚セミナーの開催

今年度のセミナーは11月6日（木）、KKRホテル東京での開催を予定しています。テーマ等については、ピラミッド会議で検討します。

地域研修会と技術懇談会等の開催

地域研修会を引き続き開催します。開催地域の優秀農場を中心とした技術情報交換会や技術懇談会の開催もあわせて検討します。



協会だよりの発行

協会だより55号（4月）、56号（7月）、57号（10月）、58号（1月）を発行します。

会員へのインタビュー、S P F ポーク販売の取り組みなど、引き続き積極的に取り上げます。

販促用資材の制作と普及

店頭用ポークリーフレット、協会パンフレットを引き続き希望会員に無料配布します。また、認定農場向けオリジナルキャップとTシャツの販売を継続します。

S P F ポークに対する正しい知識の普及

●イベントへの参加

今年も日本食肉流通センター主催「ちくさんフードフェア」に参加を予定しています。さらに他のイベントや地方で開催されるイベントに参画できないか検討します。

●S P F ポーク販売店情報の収集、整備

協会だよりの取材を通じて得たS P F ポーク取り扱い店舗や認定農場のネット販売などの情報を提供していきます。また、食育の一環として、幼稚園や保育園、調理学校などを対象とした試食会の開催を検討します。

●認定シールの利用促進

シール運用規則を見直し、利用しやすい方法を検討します。

●S P F 豚紹介資材の制作と展示

S P F 豚を理解するための資材を作成し展示することを検討します。

協会HPを活用した会員相互の情報交換コーナーの開設

協会ホームページに会員限定の掲示板等を作成、認定農場ならではの悩み、疑問点等に対し専門家が回答する相談窓口や、会員同士がカキコミ等により情報交換ができるようなコーナー等の設置を検討します。

今号より新たに豚のウイルス性疾病について概説することになりました。口蹄疫や豚コレラなどのように家畜伝染病予防法に指定されている監視伝染病の多くはウイルスを原因としています。健全な養豚を営む上でウイルス性疾病に対する知識は欠かせません。連載開始にあたり、各疾病の話題に入る前にウイルスとはどういうものかについて、まず解説したいと思います。

ウイルスは核酸（DNAあるいはRNAのどちらか）とそれを取り囲むカプシドと呼ばれるタンパク質で構成されています。核酸とカプシドを合わせてヌクレオカプシドと呼びますが、多くの場合、これは正二十面体あるいはらせん状構造をとり立体的対称性を示します。ウイルスの種類によっては、ヌクレオカプシドがエンベロープという脂質でできた膜で覆われて感染性を持つ完全粒子になります。その大きさは数十～数百ナノメートル（1ナノメートルは百万分の1ミリメートル）です。一般的な細胞の100～1000分の1のサイズという、電子顕微鏡でようやく肉眼的に捉えることができる非常に単純で最も微小な微生物、それがウイルスです（写真1）。

ウイルスはエネルギーを産生・活用する生物としての機能を欠如しているため、細菌、真菌、藻類、原虫、

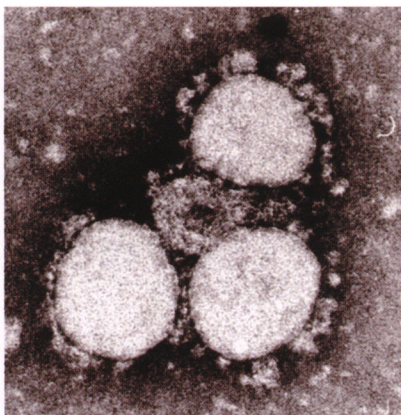


写真1. 豚流行性下痢ウイルスの電子顕微鏡像
直径95-190nmで多形性を示す。
(農研機構動物衛生研究所ホームページ
<http://www.naro.affrc.go.jp/niah/disease/ped/index.html>より引用)

植物、動物などその他の生物の細胞内に侵入し、その代謝機能を利用して初めて増殖することが可能となります。まず感受性細胞表面の受容体に吸着後、細胞内に侵入して核酸を放出（脱殻）します。脱殻により遊

離した核酸は大量に複製される一方で、転写されたmRNAから大量のウイルス蛋白質が合成されます。やがてこれらが集合して子孫ウイルス粒子が構築され、細胞外へと放出されます。この一連の過程の中でウイルス感染細胞が機能障害に陥って破壊されるとともに、生物個体（宿主）の防御機構が働くことによって正常に保たれていた身体の恒常性が崩れて病気が引き起こされます。ウイルスによっては特定の臓器・組織に高い親和性を示すことがあります。例えば、腸など消化器に親和性を示す豚流行性下痢ウイルスが感染した場合には下痢が、肺など呼吸器に親和性を示すインフルエンザウイルスの感染では呼吸促進や激しい咳が症状として現れます。急性例では感染後数日で宿主に症状が観察され、ときに死に至ることもありますが、やがて免疫システムが働きウイルスが排除されて快復に向かいます。しかし一方で、感染した細胞をがん化させる腫瘍ウイルス、また、宿主細胞を破壊せずに増殖して共存するウイルスや、感染後増殖を一時停止し休眠状態に入って宿主体内に居座り続けるウイルスも存在します。このような持続感染や潜伏感染といった巧妙な生存戦略をとるウイルスの感染では、症状が見えにくく対応が難しくなります。

ウイルスを特異的に攻撃する有効な治療薬というのはそう多くありませんし、ワクチンがある場合でもそれを使用するだけでは完全にウイルス病を制御することは困難です。したがって、畜産現場でのウイルス病対策において最も重要なのは、ウイルスを侵入・まん延させないよう適正な飼養衛生管理を行うことです。上記のように、ウイルスは単独では環境中で生きていきませんので、宿主動物との間で感染環が成立しないよう、導入家畜の検疫や施設・車両の洗浄・消毒、立入者・管理者の衣服・履物交換、管理者の専従化など可能な限り細やかな対策をとることを常に念頭に置いておく必要があります。

人間社会に迫り来る大型獣類たち I

岐阜大学応用生物科学部教授 鈴木 正嗣

いま、野生鳥獣による農林業被害、いわゆる鳥獣害が全国的に深刻化しています。農林水産省が発表した平成24年度の農業被害額は約230億円に達し、そのうちシカによるものは82億円、イノシシによるものは62億円とされています。これらの被害には、「鳥獣による農林水産業等に係る被害の防止のための特別措置に関する法律」等にもとづく巨額の対策費が注がれているものの、未だに明らかな効果は現れていません。さらにイノシシについては、野生個体群内で「豚と共通する感染症」や「家畜豚に由来する遺伝子」の保持・保有が確認された例もあり、動物衛生や生物多様性に関する課題も指摘されています。これらの背景を踏まえ、大型獣類をテーマとする本連載は、「人間社会との関係性の歴史」から始めたいと思います。

◆ 被害原因に関するよくある誤解

被害状況などの聞き取り調査をしていると、年配の方からは「昔は今のようシカやイノシシによる被害はほとんどなかった」と聞くことが少なくありません。そして、特に都市住民の多くが、「人間による開発や人工林の増加により山林内の食べ物や住処が奪われ、これが原因で農耕地に出没するようになった」と認識しています。

しかし近年の調査により、この解釈は必ずしも正しくないことが明らかになりました。環境省によれば、1978年以降の25年間で、シカとイノシシの分布域はそれぞれ約1.7倍と1.3倍に拡大したとされています (<http://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort6/effort6-1/ref05c.pdf>)。この傾向は現在も続いており、シカでは全国的に、イノシシでは東日本での拡大が著しいことが報告されています。また、生息数を反映すると考えられる捕獲数についても、1990年頃からはほぼ一貫した増加が続いています (<http://www.biodic.go.jp/activity/policy/kyosei/23-5/files/4.pdf>)。

◆ 分布拡大等の発生要因

このような分布の拡大はなぜ起こったのでしょうか。端的に言えば「シカやイノシシ等の獣類にとっての生息環境が好転しているため」と説明されます。更に、その根底には「国策の転換」があったとされています。

例えば減反政策。減反政策は、中山間地域の過疎高齢化と相まって多くの耕作放棄地を生み出すことになりました。これらの耕作放棄地は、餌となる草本や両生類等を多く産生するため、獣類の活動・繁殖のための資源を提供する絶好の場として機能してしまいました。ここで留意すべきは、「耕作放棄地を活動の場とする個体は、必然的に近隣の耕作地における被害をも深刻化させる」という点です。地域によっては鳥獣害が離農・離村原因の一つとなっており、生息環境の好転と被害の深刻化、中山間地域の衰退とが、まさに悪循環として繰り返されているわけです。

また、エネルギー源を薪や炭から化石燃料へとシフトさせた「エネルギー改革」も、シカやイノシシの分布拡大と生息数増加をもたらしたと言われます。この政策は、薪炭林を含む山林の利用と管理を減退させ、獣類の餌資源として重要な下層植生や堅果類の増加を著しく促すことになったためです。

最近では鳥獣害増加の要因として、狩猟者の減少・高齢化がしばしば挙げられます。もちろん捕獲圧低下の影響は無視できませんが、より根本的な原因が「高度経済成長とも関わる国レベルの政策転換の波」にあることは認識しておくべきでしょう。

<参考文献>

兵庫県森林動物研究センター (編) (2014) 兵庫県におけるニホンイノシシの管理の現状と課題、兵庫ワイルドライフ モノグラフ6号。兵庫県森林動物研究センター、兵庫。
小寺祐二 (2011) イノシシを獲る。農山漁村文化協会、東京。
高橋春成 (編) (2001) イノシシと人間。古今書院、東京。
依光良三 (編) (2011) シカと日本の森林。築地書館、東京。

◆訃報◆

北海道大学名誉教授

前SPF農場認定委員会委員長

波岡茂郎先生がご逝去

4月22日、北海道大学名誉教授で前日本SPF豚協会SPF豚農場認定委員の波岡茂郎先生がお亡くなりになりました。享年85歳。

波岡先生は日本のSPF養豚の生みの親といえる方で、先生なくしてはわが国のSPF養豚の今日ではなかったといっても過言ではありません。

農水省家畜衛生試験場時代（現動物衛生研究所）の1963年、わが国独自のSPF養豚の研究開発に着手、1965年には日本のSPF豚第1号の作出に成功し、さらに1967年には官民一体となったSPF豚研究会発足に尽力されました。1969年の日本SPF豚協会設立においてもその実行力、指導力で多大なるご貢献を賜りました。

その後北海道大学獣医学部教授に就任されてからは教育者として後進の指導にあたられました。

退官後は認定委員長の立場で認定制度はじめ協会事業を支えていただきました。先生は他にもさまざまな研究組織や学会の要職を歴任されていましたが、近年すべて後進に譲られていました。しかし、認定



2006年9月行なわれた、協会の重鎮である波岡先生・本田英三先生・海老成直先生の「ご長寿を祝う会」で挨拶される波岡先生

委員長の職を柏崎守現委員長に譲られてからも「協会の認定委員だけは」と続けてくださいました。

1年ほど前から体調を崩され、今年に入ってから闘病生活を送っておられた先生ですが、強い精神力でつらい治療に耐え「何とか病を克服し、早く認定委員会に復帰したい」とおっしゃっていた矢先の、まさかの急逝でした。奥様の雅子さんのお話では、亡くなる当日も庭に出て「今年は花がきれいだ」とおっしゃっていたそうです。

先生は敬虔なクリスチャンで、通夜、葬送式は普段から熱心に通われていた地元の教会にて執り行われました。関係者、教え子などが全国から駆けつけ、最後のお別れをしました。

長い間本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

●協会からのお知らせ●

●代議員・役員交代

東北地区選出代議員の高橋正氏（岩手県、(有)ケイアイファーム）に代わり渡辺和宏氏が、同じく東北地区選出代議員で監事の工藤修氏（岩手県、全農畜産サービス(株)東日本原種豚場）に代わり飯田恭久氏が、それぞれ就任されました。また、中部・北信越地区選出代議員の若林賢悟氏（長野県、長野県農協直販(株)SPF種豚センター）に代わり澤村賢治氏が就任されました。

●認定委員の交代

組織内人事異動に伴い、全農畜産サービスピラミッドの認定委員が飯田恭久氏から平井結花氏に交代いたしました。

●10月のちくさんフードフェアに出展します

3ページの事業計画にもある通り、今年も川崎市東扇島の(財)日本食肉流通センターで開催される「ちくさんフードフェア」(10月11～12日)に出展いたします。皆さまのご協力をお願いいたします。

●11月6日にSPF豚セミナーを開催

今年度のSPF豚セミナーを11月6日(木)、東京KKRホテル東京にて開催する予定です。詳細は改めてご案内いたします。ぜひご参加ください。

<編集部より> 都合により「プロのシェフおすすめ、カントン、おいしい、SPFポークレシピ」は休載します。

紹介●SPFのお店21

ひこま豚ファーマーズショップ

北海道茅部郡森町赤井川139 TEL.01374-7-1456 FAX.01374-7-1457
http://www.hikomabuta.com

「ひこま豚」とは認定農場・(有)道南アグロ産豚肉のことで日浅文男社長の「ひ」と地元の霊峰・駒ヶ岳の「こま」からのネーミング。その直売店が昨年9月オープンした「(株)ひこま豚ファーマーズショップ」です。一大観光地・函館に向かう幹線道路沿いにあり、赤い屋根が目立ちます。明るくておしゃれ、清潔感溢れる店内は、精肉や加工品販売のほか、オリジナルSPFポークメニューが食べられるイートインコーナー付きです。



文男さんの長男で同店社長の日浅順一さんは以前SPF豚肉専門店に勤めていた経験を持ち、当時の同僚シェフ、附田明広店長（本誌レシピでもおなじみ）と一緒にこのお店を立ち上げました。事前の宣伝は一切なしでしたが、地の利と口コミが評判を呼び、順調に売り上げを伸ばしています。特に初めて迎えた5月の連休は大変な混雑だったそうです。精肉販売と食事の売り上げはほぼ半々。リピーターが多いとのことで、おじやましたのは平日の午後でしたが食事客や買物客がひっきりなしでした。

精肉はもちろん、店内の加工場で作る豚肉の空揚げなどの惣菜や加工品（一部委託）も好評。店内メニューも豊富で、とくに人気なのが「オーダーカットステーキセット」。精肉ショーケースから部位を選び厚さ・量・味付け・焼き加減をお好みでオー



左から附田店長、日浅社長、スタッフの成田さおりさん

3か月に1度変えるという豊富な店内メニュー

ダーできるもの（価格は肉代+500円）。SPFポークならではの素材を生かした逸品です。また、ネットや宅配での全国販売に加え、片道15キロ圏内なら専用車で「お鍋セット」や「焼肉セット」の配達もしています。

目指すは「農場で生産する豚肉の全量を直売すること。そのためにももう1軒、5年以内にひこま豚専門レストランを」（日浅社長）。元気をもらえ、また訪れたいくなる、そんな「SPFのお店」でした。

●認定情報●

●平成26年度認定農場

[6月認定] (有効期間:平成26年6月5日から27年6月30日まで)
北海道・(有)鈴木ビビッドファーム、青木ビッグファーム、(有)ゲズント農場、ホクレン養豚技術センター、(有)フロイデ農場、岩手県・FVファーム、秋田県・JA秋田しんせい肥育豚農場、福島県・(有)東和牧場、茨城県・(有)弓野畜産繁殖農場、(有)弓野畜産八郷農場、(有)弓野畜産千代田農場、(有)篠崎畜産、(有)奥田農場、群馬県・JA東日本くみあい飼料(株)利根スワインセンター、千葉県・石毛宏司養豚、高橋幸雄養豚、(有)下山農

場第2農場、(有)ピギー・ジョイ第1農場、木内養豚第1農場、木内養豚第2農場、鳥取県・(株)西日本ジェイエイ畜産名和農場、岡山県・岡山JA畜産(株)荒戸山SPF農場、長崎県・(有)伊藤ファーム、浜田養豚、宮崎県・(有)レクスト、江夏商事(株)御池農場、クリーンファーム(株)、江夏商事(株)川南農場、鹿児島県・(株)かいたく大口農場、鹿児島いずみ畜産(株)三笠農場、(有)さつま農場
(以上31農場)

※次回認定委員会は平成26年9月11日(木)の予定



(有)ふなばやし農産
布施 久さん
 ●青森県十和田市

長く働ける環境づくりと 堅実な経営で会社を守る2代目

東北を代表する景勝地・奥入瀬渓流や十和田湖を有する十和田市。認定農場である(有)ふなばやし農産第1農場と同第3農場は農場内から八甲田連峰を望める自然豊かな場所にあります。2農場合わせて母豚数約1,500頭の大規模農場です。昨年の協会セミナーにおいて田中良市農場長に「無薬豚生産を含む取り組み」と題して事例発表いただいたのも記憶に新しいところです。

本社は十和田市内の中心地にあります。1969年、養鶏経営としてスタートしました。創業者は先代社長の布施正治さん、現社長の久さんの義理のお父さんです。ちなみに「ふなばやし」という社名は会社を立ち上げた3人の名字を一字ずつとったものだそうです。その後関係者の依頼もあって1976年に養豚を開始、1985年にはSPF豚を導入しました。

久さんは地元十和田市出身、北海道の大学を卒業後東京で建築関連会社に就職されましたが、高校の同級生だった正治さんのお嬢さん、睦子さんとの結婚を機に地元に戻り、2代目として入社されました。

大学は商学部、畜産はまったくの素人だった久さんでしたが、「大事なのは経営」と専務時代そのイロハを先代にみっちり仕込まれたそうです。「飼料会社はじめ周りの人に助けられました」。鶏から始まった同社ですが、「豚は大変ですが面白いですね。やり方次第で利益が出るから励みになりました」。

成績を左右するのはやはり人材。「個人差があるのは仕方ない。どうやって全体を向上させるか。そのため



布施 久さん、睦子さんご夫妻

にも長く働いてもらえる環境づくりが大切ですね」。

また、「無薬豚生産に取り組むのもニーズがあるから。コストを重視しながら消費者に喜んでもらえる豚肉を作っていけば、生き残れるのではないのでしょうか」。

学生時代は長身を生かしハンドボールの選手としてインカレ出場の経験もあるスポーツマンの久さんですが、今はゴルフをおつき合い程度、趣味は庭の植木の手入れとなかなか渋めです。

知り合ってから40年近く、結婚してからも「けんからしいけんかはしたことがない」というご夫婦。身の回りのことは何でも自分でやれるという久さんは「妻や義母が同時に不在のときは、子どもたちのお弁当作りも含めて全部やりましたが、まったく苦になりませんでしたよ」。ほがらかではなくなりした雰囲気睦子さんも「優しい人ですよ」とにっこり。穏やかな夫婦円満ぶりが伝わってきました。

3人のお嬢さんのうち、大学生の末娘が跡継ぎ志望とのこと、「2代目は会社を守るのが一番の仕事。入社したいと思ってもらえるような、魅力的な会社にしないといけないですね」。謙虚で堅実なお人柄が感じられる一言でした。(編集部)

編集後記 今回のPED発生は日本の養豚の現状をいろいろな意味で表面化させました。人や物の往来の不透明さ、交通網の複雑怪奇さなどなど。さまざまな情報が交錯する中で、防疫レベルが高いとされる農場の感染にも耳を疑いました。SPF豚生産に携わるすべての人にSPF養豚を心から理解してもらい、協力を得る。その努力が不足していたことを猛反省させられます。今号より動衛研の専門家による豚のウイルス病の連載がスタート、害獣対策も鈴木教授の大型害獣についての解説が始まりました。ご愛読下さい。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは
日本SPF豚協会の
 登録商標です

日本SPF豚協会だより

第56号 2014年7月1日発行(季刊)
 発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
 〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
 TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
 e-mail : j.spf.a@nifty.com
 http://www.j-spf.com/
 発行人 北島 克好
 編集人 藤田 世秀